

日興と弟子檀越に関する一考察

——日興書状にみえる物品の授受を中心として——

本 間 俊 文

一、はじめに

六老僧の一人、白蓮阿闍梨日興（一二四六～一三三三）の書状は、『日興上人全集』^①（以下『興全』と略記）によれば九三通（内五通は写本）が確認されており、日蓮聖人の直弟子の中でも群を抜いた数が今日まで伝来している。直弟子の日興が記したこれらの書状は、日蓮教団初期の動向を直に伝える貴重な史料であるが、一方で系年や内容等については説明すべき課題も多いのが現状である。^②

日興書状における注目すべき点の一つは、物品の授受に関する記述が多数見られることである。聖人の遺文中にも数多くの物品名が散見されることは周知の事実だが、日興書状の中で物品授受が記されるものは六四通を数え、そこに記される物品数は一〇四種類にものぼる。これら

の物品は年中行事・仏事に際しての供物や、弟子檀越から日興への供養の品が大半であるが、中には日興から弟子檀越への贈与品も見受けられる。中世社会においては物品の贈答行為は日常的に行われ、当時の人々の生活はこのような贈答品への依存度が極めて高かったことが指摘されているが、^③このような観点から、多数の物品授受が記される日興書状は聖人遺文同様、鎌倉期における日興とその周辺の生活状況や文化の一端を紐解く貴重な文献史料であるといえよう。

そこで本稿では日興文書研究の一環として、日興書状に記される物品の授受に着目したい。そして贈与者と物品の関係や年中行事・仏事における物品授受の視点から、日興と弟子檀越の交流ならびに日興在世中の生活状況と文化について少しく考察したい。なお、本稿中における日興書状名や引用文については『興全』の表記に従っ

た。^④

二、日興書状にみえる物品

中村練敬氏は『日蓮聖人と諸人供養』において、聖人遺文にみえる物品を一六項目に分類して考察をされ、また坂井法曄氏は日興書状にみえる物品研究の第一作業として、それらの品目を列挙されている。^⑤これらの先行研究を元にして、本稿ではまず日興書状に記される物品を種類別に分類し、整理する作業を行った。分類方法については、中村氏が『日蓮聖人と諸人供養』において聖人遺文にみられる物品を一六項目に分類していることから、その分類を基準として行った。なお、【】内に『興全』の収録頁数を示した。

【表一】日興書状にみえる物品一覧

①衣料品（二種類）

- ・かたひら（帷子）【223、236】

②銭貨（一種類）

- ・用途【156、161、166、182、223、225、226、227、237、247】

③糧饌品（六種類）

- ・米【203、211、226、236、360】
- ・白米【161、165、173、181、188、194、215、224、225、227】
- ・わせやきこめ（早生焼米）【229】
- ・おこにめ（おこし米か）【188】
- ・むき（麦か）【232】
- ・粟【202】

④餅類（三種類）

- ・もちる（餅飯）【161】
- ・くさのもちる（草の餅飯）【227】
- ・ちまき（粽）【172、227、235】

⑤酒（四種類）

- ・御酒【155、158、165、172、188、190、196、205、215、217、224、225、230、232、233、235、236、250】
- ・清酒【160、161、227】
- ・濁酒【160、227】
- ・こす（御酒か）【194、214】

⑥調味料（四種類）

- ・みそ（味噌）【227、236】
- ・しほ（塩）【227】
- ・ぬか（糠）【251】
- ・かす（粕）【236】

⑦菜蔬類（三三種類）

- ・瓜【191、201、252】
- ・熟瓜【155、170】
- ・ひさく（瓢・夕顔）【173、203、250】
- ・牛房【165、203、227】
- ・はしかみ（薑）【187、198、202、203】
- ・わさひ（山葵）【188、227】
- ・たかなな（竹子・筍）【233、240】
- ・しのへ（篠芽）【227】
- ・せり（芹）【196】
- ・ふうき（蔞か）【227】
- ・かふら（蕪）【165、188、189】
- ・ねき（葱）【213】
- ・たら（たらの芽）【227】
- ・わらひ（蕨）【227】

- ・つくし【171、227】
- ・あさみ（薊か）【227】
- ・まめ（豆）【227】
- ・ささけ（大角豆）【236】
- ・手ささけ（手大角豆か）【173】
- ・わせささけ（早生大角豆）【191】
- ・芋【161、165、198、227、251】
- ・わせいも（早生芋）【213】
- ・山のいも【227、233】
- ・ふるのいものくき（芋茎）【213】
- ・芋殻【209】
- ・この芋【161】
- ・ぬかこ（零余子・やまのいものこ）【175、186】
- ・根芋【173、250、360】
- ・ところ（野老）【227】
- ・くすのこ（葛粉）【161、227】
- ・えひね（海老根）【161、227】
- ・きのこ【227】
- ・しいたけ【161、185、186】

⑧藻類（一〇種類）

- ・河苔【161、186】
- ・あまのり（甘海苔）【227】
- ・かちめ（搗布）【165、227】
- ・こふ（昆布）【181】
- ・わかめ【181】
- ・とさかのり（鶏冠海苔）【188】
- ・みる（海松）【188】
- ・かいさう（海藻か）【224】
- ・ひしき（ひじき）【227】
- ・あをのり【188】

⑨果実類（二〇種類）

- ・わせもも（早生桃）【214】
- ・柑子【206】
- ・ありのミ（梨）【249】
- ・くしかき（串柿）【211】
- ・かふち（橙）【206】
- ・くるみ【189】
- ・くり（栗）【227】
- ・わせくり（早生栗）【229】

- ・あをくり（青栗か）【249】
- ・ひさいくり【188】

⑩副食物（六種類）

- ・うちたうふ（宇治豆腐か）【165】
- ・すりたうふ（すり流し豆腐か）【165、188】
- ・こたうふ【161】
- ・納豆【165】
- ・にまめ（煮豆）【227】
- ・香物【177】

⑪甘味類（なし）

⑫文房具（四種類）

- ・筆【161、188、244】
- ・墨【188】
- ・紙【161】
- ・すくし（宿紙か）【189】

⑬薬餌品（五種類）

- ・きちひ（橘皮）【191】

・ほしはしかみ（干し薑・かんきょう）【185、191】
・甘草【191】

・せんこ（前胡）【227】

・ひゑとりのくすり【228】

⑭御馬（一種類）

・御神馬【182】

⑮土地（一種類）

・田【159】

⑯調度・什具類（四種類）

・飯桶【161】

・はし（箸）【227】

・おしき（折敷）【189、227】

・にとうき（煮陶器か）【189】

⑰その他（五種類）

・竹すたれ（竹すだれ）【217】

・たたみのへりのぬの（畳のへりの布）【247】

・すみ（炭）【207、217、241】

・わらくさ（藁草か）【251】
・きくの花（菊の花）【171】

⑱品種不明（六種類）

・具足【194、200、215、224、230】

・富士郡の珍物【197】

・御手作の一桶【195】

・さかな（肴か）【205、233】

・大王【188】

・いものさす【227】

以上、日興書状にみえる物品は一〇四種類確認でき、それらを中村氏の提示した分類を基準として一八項目に分類した。表一によると、②銭貨、③糧饌品、⑤酒の授受が頻繁に行われていることがわかるが、これらの品目と聖人遺文に見られる品目を比較しても、さほど大差は見られない。しかし日興書状では聖人遺文に比べ、加工食品である副食物の増加が見られる点や、『日興門流上代事典』に指摘されるように、追善供養のための田の進上がみられる点の特徴的である。⁷⁾

物品個々の詳細については不明な点も多いが、その点

に關しては別稿に譲ることにしたい。

三、贈与者別にみた物品の授受

日興書状にみえる物品の種類について確認してきたが、次にこれらの物品授受と贈与者・被贈与者との關係に注

目したい。贈与者別に物品授受の記録をまとめると以下の表二のようなになる。なお、表二については贈与者と被贈与者が判明しているものに限って収録した⁸⁾。また物品項の（ ）内は物品の量を表している。

【表二】贈与者別にみた物品一覧

贈与者										↓	被贈与者	No.	物 品	日興書状名	系 年	『興全』頁
↓										↓	了性房日乗	①	白米（二升）・昆布・わかめ（一）	『与了性御房書』	八月二十七日	一八一
↓										↓	了性房日乗	②	用途（百文）	『与了性御房書』	九月九日	一六六
↓										↓	了性房日乗	③	零余子（一紙袋）	『与了性御房書』	九月二十六日	一七五
↓										↓	了性房日乗	④	しいたけ（一紙袋）・干し薑（一紙袋）	『民部公御房御返事』	二月十八日	一八五
↓										↓	民部公日盛	⑤	薑（十把）	『与民部公御房書』	七月二十六日	一八七
↓										↓	民部公日盛	⑥	やまのいものこ（一紙袋）・しいたけ（五連）・河苔（一帖）	『与民部公御房書』	七月二十七日	一八六
↓										↓	大式公	⑦	橘皮・干し薑・甘草	『大式公御房御返事』	六月二十九日	一九一
↓										↓	美濃公	⑧	蕪（五）・くるみ（二十）・すくし（三）・折敷（二束）・にとうき（三束）	『美濃公御返事』	十二月二十九日	一八八
↓										↓	新発御房	⑨	粽（一束）	『了性御房御返事』	五月四日	一七二
↓										↓	鬼房殿	⑩	あをくり（二升）・ありのみ（二十）	『鬼房殿御消息』		二四九

日興	↓											↓	日興
そねのすけ													日興
⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔
柑子(百)・かふち(十五)	清酒(大瓶一)・白米(一斗)・餅飯・芋(莫大)・この芋(二籠)・葛粉・しいたけ・河苔(八帖)・こたうふ・海老根・用途(一結)・紙・筆・飯桶(一)	御酒(一具)・白米(三升)・牛房(一把)・蕪・芋(五升)・搗布(五把)・うちたうふ(一はち)・すりたうふ・納豆	清酒・濁酒	御酒(一具)・熟瓜(二籠二十五)	田(一段)	御酒	熟瓜(十五大小)	白米(二升)・瓢・根芋・手大角豆(莫大)	つくし・菊の花	御酒・粽(一束)	香物	御酒(一具)	用途(三貫文)・御神馬(一疋)
『与そねのすけ書』	『卿僧御返事』	『新田阿闍梨御房御返事』	『西坊主御返事』	『西御坊御返事』	『西坊主御返事』	『卿僧御返事』	『了性御房御返事』	『了性御房御返事』	『了性御房御返事』	『了性御房御返事』	『了性御房御返事』	『式部殿御返事』	『弁阿闍梨御返事』
十月七日	四月二十四日 (正中二年か)	一月十二日	一月十四日	七月七日	八月十日	十二月二十九日	正和四年(三三五) 七月十日	文保二年(三三八) 七月十三日	一月二日	五月四日	六月八日	九月六日	
二〇六	一六一	一六五	一六〇	一五五	一五九	一五八	一七〇	一七三	一七一	一七二	一七七	一九〇	一八二

ぬくま殿	↓	日興	④②	葱（三把）・早生芋（一籠）・ふるのいものくき（十連）	『ぬくま殿御返事』	七月十九日	二二三
六郎入道	↓	日興	④③	米（紙袋二）・串柿（五連）	『六郎入道殿御返事』	十二月二十八日	二二一
新田殿御方	↓	日興	④④	用途（莫大）	『坊主御返事』	永仁六年（二九八）十二月六日	一五六
妙性尼御前	↓	日興	④⑤	用途（御料として二筋、薬料として三筋）・畳のへりの布（一きれ）	『妙性尼御前御返事』	正和三年（三八四）八月二十一日	二四七
いよ尼	↓	日興	④⑥	帷子（一）	『御しゅ御返事』	六月八日	二二三
由比殿	↓	日興	④⑦	米（一）・根芋（一升）	『与由比氏書』		三六〇

まず、日興から物品贈与を受けた弟子檀越は七名確認できる。日興の物品贈与が記される日興書状（表二①）⑪の中には、日興が弟子檀越に対して贈った物品と共に、その時の弟子檀越側の状況を示す記述を見出せるものがある。それらを以下に列記する。

○日興↓了性房日乗

①日興『与了性御房書』

御いたハしけの事承候ハ如何^⑨

②日興『与了性御房書』

民部殿の事、其後おほつかなく思奉候（中略）

（用途）
ようとう候ハすハくたりうち候ハめ^⑩

③日興『与了性御房書』

其後民部殿御旁如何委細可^⑪示給候

○日興↓民部公日盛

④日興『民部公御房御返事』

なによりもかまくら中の大怪おとろきおほえ候^⑫

⑤日興『与民部公御房書』

さては鎌倉中災難事承候了^⑬

⑥日興『与民部公御房書』

京都院中災難事もたいなくおほえ候。さては坊主御旁之由承候ハ僧都御房御事にて候歟^⑭

○日興↓大式公

⑦日興『大式公御房御返事』

きひちかんきやう候まゝ進候。甘草ハ人にこひ(請)
て候へハこれはかり候とてたひて候をそへてま(給)
いらせ候。御勞本覆由承て悦て候へハさやうに
又おとらせをハしまして候覽御事もんたいなく
覚候。¹⁵

○日興↓鬼房殿

⑩日興『鬼房殿御消息』

鬼房殿のつれ／＼おもひやりまいらせて候へと
もおさない人のなくさみになり候ぬへきもの候
ハて不□。¹⁶

本六人の一人とされる了性房日乗宛書状①～③から
は、日乗やその弟子民部公日盛が病にかかり、それを懸
念する日興の様子が窺える。日盛宛書状④～⑥には病に
関する記述は見られないが、日盛は鎌倉の日乗の元で勉
学に励んでおり、その様子を日興はしばしば気にかけて
いたようである。¹⁸ また⑦では病に臥した大式公のため
に日興が薬草を贈り、さらに⑩では幼い鬼房殿の退屈な
気持ちがあしでも紛れるようにと果物を贈ったことが記

されている。

これらの弟子檀越への贈与品は比較的多種に渡っており、すべて日興自身が調達したものと考えるにくいように思われる。中世においては、手元に来た贈与品をそのまま別人への贈与に充てることが一般的に行われ、いわゆる贈与品の流用が当時の物品の供給ルートの一つとして存在したことが指摘されているが、恐らく日興の場合も、別の弟子檀越からの贈与品を流用したケースもあったであろう。そうであれば、日興に限らず弟子檀越からの贈与の場合もまた同様のことが想定できる。いずれにせよ日興からの物品贈与は、弟子檀越側の現状改善を願い、激励の意をこめて贈った事例が多く見られ、ここに日興の弟子檀越に対する配慮の一端を見ることができ。次に、日興への物品贈与がみられる弟子檀越については一六名確認できる。その内僧侶では、日興が重須に移住した後、大石寺にて住持を勤めた日目に注目したい。日目の物品贈与における特徴の一つは、年中行事・仏事に際した供物の贈与が多い点である。表二記載の日目宛日興書状六通(⑫～⑰)の内、五通(⑭以外)にみえる物品贈与がそれに該当し、年中行事・仏事のための物品贈与に対する日目の積極的な姿勢が窺える。なお、年中

行事・仏事と物品授受の関係については後述したい。

また日目は日興の元へ芋や野菜、米等の農作物を贈っているが、これに関連する記述を以下に挙げる。

[1] 五月晦日 民部公日盛『与又五郎殿書』

又満園の作物等、皆草深くしげり候の間、指しはてて候、二文字、はじめ、きたね、なす、ひる、^子五^蒜のようなものは草はと^りて候えども、よ^余のものは、さのみかなわず候^物。

[2] 七月七日 日興『西御坊御返事』(表二¹⁶)

御手作の熟瓜二籠^{二十五}(中略) 聖人御影の御宝前に申上まいらせ候了⁽²¹⁾

[3] 正和元年(一一三二) 十一月十一日

新田頼綱『讓状』

卿殿(日目)のて(手)□(つ)□(く)□(り)の田壹段⁽²²⁾

[4] 元亨元年(一一三二) 八月十日

日目『与大進公御房書』

手作の田一反^金進上候也⁽²³⁾

[5] 年月日未詳 日目『奥人御消息』

日本国にふき候ハぬ風、上野・重須上方はか

りにふきて、田ハ一も無候。麦は損候了⁽²⁴⁾

[1] は日盛が大石寺で日目の留守居を務めていた時の書状であり、本状の記述から大石寺周辺の畑にて二文字(韭)・薑・きたね・茄子・蒜をはじめとする種々の農作物が栽培されている様子が窺える。[2] では日目が手作の瓜を日興の元へと届けており、[3] [4] の記述からは日目自身が稲作を行っていたことがわかる。また[5] では日目自身の作物かどうかは判然としないが、麦の栽培も行われていた可能性が読み取れる。聖人在世中に聖人の元で耕作が行われていたことを伝える記録も見られるが、[1] [5] の記述から、日興在世中に大石寺周辺の田畑において、日目をはじめとする弟子達によって積極的に耕作が行われていたことがわかる。ここで收穫された農作物は、大石寺住僧の食膳にものぼったであろう。また今挙げた農作物の中で実際に日興の元へ届けられたことが確認できるものは「2」にみえる熟瓜のみであるが、收穫された他の農作物もまた供養品として日興の元へと届けられたことが推察される⁽²⁵⁾。

他にも日目は日興の元へ筆や紙等の文房具を届けているが(表二¹²)、次の「6」[8]には文房具の授受に

関する記述を確認することができる。

〔6〕十二月二十一日 日目『与民部公御房書』

扇三本給候ぬ（中略）又了性御房墨筆たしかに候（中略）あふきたんしていのもの、かいてたひ候へと申て候しかとも、はやかハせ給て候ハ、たひ候へく候⁽²⁷⁾

〔7〕七月二十七日 日興『与民部公御房書』

（表二⑥）

御学門候覧に紙なとをもまいらせす候事無⁽²⁸⁾心本⁽²⁹⁾候

〔8〕年月日未詳 日興『つばねの御消息』

上品のふて十管給候て聖人の御見参入まいらせ候ぬ。此程大事の聖教をかゝせ候つるに井中にてハすへてよきふてにあひ候ハぬに返々悦入候⁽²⁹⁾く

〔6〕の日目書状によれば、日盛と日乗から日目の元へ扇・墨・筆が届けられ、さらに日目が扇・檀紙等の購入を依頼している様子が見られる。また〔7〕〔8〕の記述からは、日興の生活環境においては紙や良質の筆を

入手しにくい状況にあることが窺える。日乗の活動拠点には主に鎌倉であり、その日乗の元で日盛は学問や布教活動に励んでいたことが諸文献に散見される⁽³⁰⁾。大石寺や本門寺近辺では手軽に文房具が入手しづらい環境であったから、日目は〔6〕にあるように鎌倉の日乗・日盛に買い物を依頼したのであろう。したがって、当時の文房具の入手経路として鎌倉での購入品がみられることから、日目が日興の元へと届けた筆や紙は、日乗や日盛が鎌倉にて購入してきた依頼品であった可能性が大いに考えられる。

一方、檀越では曾祢殿による物品贈与が頻回であり、その様子が記される曾祢殿宛日興書状は一通（表二⑦）⁽³⁷⁾を数える。日興は永仁六年（一二九八）以降、自身の活動拠点を大石寺から重須本門寺へと移すが、⁽²⁷⁾の系年から日興の重須移住後における曾祢殿との交流が確認できる。曾祢殿の具体的な人物名は不明だが、南条時光と親交があった人物と考えられている⁽³¹⁾。曾祢氏は本来甲斐国東八代郡曾祢を本領とする一族であるが、富士郡の珍物を贈っている点や、八月二十日の『曾祢殿御返事』に「夕方童部を給てまいらせ候へく候⁽³²⁾」と夕方に童を派遣している点などから、曾祢殿は重須近隣に居住

していたと推測されている。⁽³³⁾

曾祢殿からの物品贈与は表二記載の曾祢殿宛書状一通の内、過半数の六通（⁽²⁷⁾⁽³⁰⁾⁽³¹⁾⁽³²⁾⁽³⁵⁾⁽³⁸⁾）において年中行事や仏事とは無関係な時期に行われている。そこに記される贈与はいわゆる日常的な供養であったと推測される。また曾祢殿からの贈与品は、一度の贈与における品数が比較的少ない。このように少量の供養品を度々贈与している事実から、曾祢殿は『上代事典』に指摘されるように重須近隣の住人であった可能性は高く、日興に対して

普段から芋や野菜をはじめとする供養の品々を届け、日興の重須での生活を支えた檀越の一人であったと考えられる。

四、年中行事・仏事における物品の授受

次に年中行事や仏事と物品授受の関係について見てみたい。年中行事・仏事⁽³⁴⁾に際して行われた物品（供物）授受についてまとめると以下の表三のようになる。

【表三】年中行事・仏事にみた物品の授受一覧

【行事】			行事・仏事
元旦	贈与者	被贈与者	
日興	↓	↓	
美濃公	↓	↓	
日興	↓	↓	
美濃公	↓	↓	
③	②	①	No.
御酒（一具・白米（七升）・蕪・山葵・鶏冠海苔・海松・あをのり・すりたうふ・筆（二十管）・墨（五連）・大王	御酒（一具・白米（七升）・蕪・山葵・鶏冠海苔・海松・あをのり・すりたうふ・筆（二十管）・墨（五連）・大王	御酒（一具・白米（七升）・蕪・山葵・鶏冠海苔・海松・あをのり・すりたうふ・筆（二十管）・墨（五連）・大王	物品
蕪（五）・くるみ（二十）・すくし（三）・折敷（二束）・にとうき（三束）	『美濃公御返事』	『卿僧御返事』	日興書状名
十二月二十九日	十二月二十九日	十二月二十九日	系年
一八八	一八八	一八八	『興全』頁

秋季彼岸	盂蘭盆						七夕節句		端午節句							
曾祢殿	不明	由比殿	南条殿	にし殿	日興	了性房日乗	不明	日目	不明	日興	了性房日乗	不明				
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓			
日興	日興	日興	日興	日興	不明	日興	日興	日興	日興	新発御房	日興	日興				
⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗			
富士郡の珍物	用途（三百文）	御盆料	米（一）・根芋（一升）	御酒（大瓶一）・白米（一斗）	こす（大瓶一）・白米（一斗）	用途（一筋）	角豆（莫大）	白米（二升）・瓢・根芋・手大	御酒（一具）・麦（数多）	御酒（一具）・熟瓜（二籠二十五）	御酒・粽	御酒・竹子・山の芋・さかな	粽（一束）	御酒・粽	米・用途（一貫文）	芋（一駄）・糠（一駄）・わらくさ（二駄）
『曾祢殿御返事』	『ぼんの御返事』	『御ぼんれう御返事』	『与由比氏書』	『南条殿御返事』	『にし殿御返事』	『かたびら御返事』	『了性御房御返事』	『七月七日の御返事』	『西御坊御返事』	『御節供御返事』	『よき酒御返事』	『了性御房御返事』	『用途一貫文御返事』	『わらくさ二駄御消息』		
八月二十七日	七月十四日	七月十三日		七月十三日	七月十三日	元応二年（三三〇） 七月九日	文保二年（三三八） 七月十三日	七月六日	七月七日	五月五日	五月五日	五月四日	十二月二十八日	十二月二十六日		
一九七	二三七	二二一	三六〇	二一五	一九四	二二三	一七三	二二二	一五五	二二五	二二三	一七二	二二六	二五一		

【仏事】		聖人 御命日講		二七日忌	三七日忌	十三年忌	
日	曾祢殿	曾祢殿	曾祢殿	日妙	日	不明	
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	
日興	日興	日興	日興	日興	日興	日興	
⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	
御酒（一具）・白米（三升）・牛房（一把）・蕪・芋・搗布（五把）・うちたうふ（一はち）・すりたうふ・納豆	御酒・さかな	炭（一駄）	米（二升）・夕顔（三）・薑・牛房（一束）	御酒（一具）	清酒（大瓶一）・白米（一斗）・餅飯・芋（莫大）・この芋（一籠）・葛粉・しいたけ・河苔（八帖）・こたうふ・海老根・用途（二結）・筆・紙・飯桶（一）	清酒（瓶子一具）・濁酒（大瓶一）・白米（一駄）・草の餅飯・たらの芽・つくし・わらび・ふうき・牛房・篠芽・山葵・芋（一俵）・山の芋・葛粉・野老・きのこ・豆・煮豆・栗・甘海苔・搗布・粽（三把）・あさみ・海老根・味噌・塩・前胡・用途（三貫文）・折敷・箸・いものさす	『白米一駄御返事』
『新田阿闍梨御房御返事』	『曾祢殿御返事』	『曾祢殿御返事』	『曾祢殿御返事』	『式部殿御返事』	『卿僧御返事』		
一月十二日	九月十二日	十二月十三日	八月十七日	九月六日	正申二年（一三二五）四月二十四日 か	三月七日	
一六五	二〇五	二〇七	二〇三	一九〇	一六一	二二七	

故人供養 (年忌等 不明)	故人供養 (年忌等 不明)			
	了性房日乗 日目	曾祢殿	さへの四郎	不明
	↓	↓	↓	↓
	日興	日興	日興	日興
	②⑦	②⑧	③①	③②
	つくし・菊の花	田(二段)	御酒・炭(一太)・竹すだれ (二)	御酒 (二筋)
	『了性僧御返事』	『曾祢殿御返事』	『与さへの四郎書』	『白米一斗御返事』
	一月二日	一月十七日	十二月二十四日	一月七日
	一七一	二〇〇	二二七	二二五
				二月二十八日
				二二〇

表三から、年中行事では元旦、端午節句、七夕節句、盆、秋季彼岸に際しての供物の授受が確認できる。年中行事と供物の関係で特徴的なものとしては、端午節句における粽の贈与が挙げられる。日本において端午節句に粽を食する習慣は、文献上、平安期の宇多天皇の頃からみられることが指摘されている。^{③⑤} 端午節句に際した粽の贈与は聖人遺文にもみることができ、日興の周囲でも端午節句に粽を食する習慣が取り入れられていたことがわかる。

仏事では、二七日忌、三七日忌、十三年忌、そして聖

人の月命日に際しての供物の授受が確認できる。またこの他にも日興本尊の授与書や書写年月日からは、春季彼岸や五七日忌、百箇日、一周忌、三年忌、七年忌、^{③⑦} 十三年忌等の忌日が見受けられ、日興在世中においてはいわゆる十三仏事が執り行われていたことが窺える。日興在世中の仏事の展開に関して松村壽巖氏は、聖人在世中の十仏事から十三仏事への年忌数の増加について触れ、聖人滅後の教団が在地への定着を果たしていく上で、経済的一面からも死者追善の行儀をとり入れていかざるを得なかったと推察している。^{③⑧} 年中行事・仏事は定期的

に物品授受が行われる一つの場合であり、そこでの供物は日興とその門弟らの生活の中で使用されたであろう。このような側面から追善仏事等の営為が教団内において定着化し、発展していったと考えられる。

これらの年中行事・仏事における供物には、酒と糧饌品が非常に多く見受けられる。それは表一に挙げた酒の記述二五箇所中一九箇所が、また同様に糧饌品では一九箇所中一三箇所（白米に限れば一〇箇所中九箇所）が年中行事・仏事の際の供物である。したがって、酒や米は当時最も代表的な供物であったと考えられる。もちろん先述した日興本尊授与書等にみられる年中行事・仏事の際にも同様に、弟子檀越から日興のもとへ酒や米をはじめとする様々な供物が届けられたであろうと推測される。こうした年中行事や仏事における弟子檀越からの供物は、聖人の御影前に供えられ、僧侶によって法要が営まれていたことが次の(1)～(4)の史料から読み取れ、さらには法要を勤めた僧侶に対して振る舞う僧膳に関する記述を(5)(6)に見ることができる。

(1)十二月二十九日 日興『美濃公御返事』

(表三②③)

恒時聖人の御節料、筆二十管・墨五連御宝前に備見参候了⁽³⁹⁾

(2)十二月二十八日 日興『用途一貫文御返事』

(表三⑤)

正月朔日大衆重栖御影供を仕候程⁽⁴⁰⁾

(3)七月十三日 日興『にし殿御返事』(表三⑭)

ほんれう^(盆)の御ために、こすたいへい^(大瓶)一・はくまい^(白米)一と・さいくの御くそく^(具足)、をそれ入て給候ぬ。心をいたして大しうら御きやうよみまいらすへく候⁽⁴¹⁾

(4)七月十三日 日興『南条殿御返事』(表三⑮)

ほんの御ためにきうたちみな御よりあい候ていとなませ給候よし、ほとけしやう人の御けんさん^(見参)に申しあけまいらせ候ぬ⁽⁴²⁾

(5)九月六日 日興『式部殿御返事』(表三⑳)

故寂日房三七日佛事御酒一具みまいらせ候ぬ。これにハ如形僧饌をこそしまいらせ候へ⁽⁴³⁾

(6)正月七日 日興『白米二斗御返事』(表三㉒)

八箇日故こせんの御ための御そうせんれう^(備前)白米二斗・御す大へい^(酒)一・御くそく御ふ^(具足)ミのこく給ハリ候て(中略)ことさらハかいさうハいま

たことし^(今年)ハめつらしく候にありがたく候⁽⁴⁾

(1)によれば、日興は書状に弟子檀越からの供物を仏前に供え、供物献納の旨を聖人に報告したと記しており、他の書状にも「聖人御影の御宝前に申上まいらせ候了」⁽⁵⁾等の表記が度々見られる。このような表記は、弟子檀越からの物品贈与がみられる日興書状五五通中四〇通で確認できる。このことから、年中行事や仏事の際の供物に限らず日常的な供養の場合でも、日興は物品が贈与される度に仏前に供え、読経等をもって聖人の御影に報告していたと考えられる。日興のこのような行動は、聖人が供養品を届けた檀越への書状に「此御心は法華経の御宝前に申上て候」⁽⁶⁾等と記したと類似しており、供養品に対する聖人の行動を日興は踏襲したものと推察される。

年中行事に際しては、法要が行われたことを示す記述も見られる。(2)では元旦に、(3)(4)では盆に法要が行われた様子が窺える。ただし他の年中行事、すなわち端午節句や七夕節句の際に法要が行われたかどうかについては記述がなく、不明である。先述した通り、日興は弟子檀越から物品が贈与される度に仏前に供え、その旨聖人の

御影に報告していたと推察されることから、このような法要の際もまた仏前に供物が供えられたであろう。

また(5)によれば、仏事に際して僧膳を用意する様子が窺え、当時法要に出仕した僧に対しては膳が振る舞われていた可能性が考えられる。この僧膳が具体的にどのような献立であったかは定かではないが、鎌倉時代における食文化は、武家は一般的に粗食中心の簡素な食風をとっており、また禅宗寺院においては菜蔬類を中心とした精進料理が大いに発達した時代でもあった⁽⁷⁾。したがって、これらの時代性と日興書状にみえる物品等を勘案すると、当時の日興門流における僧膳も菜蔬類を中心とした、いわゆる精進料理に類似した形式の膳であったのではないだろうか。もっとも(6)には僧膳料との名目で白米、酒、海藻の名が挙げられているが、これらは費用としての贈与であるから断定はできないものの、これらの品目が僧膳の一部として使用された可能性もあり得ると考えられる。

このように日興とその門弟によって年中行事や仏事が営まれ、それに伴って種々の供物が仏前に供えられたことを確認してきた。このことはすでに聖人在世中から見られたことであるが、高木豊氏によれば、これらの年中

行事・仏事の営為が日興の段階において一層広がりを見せたことが日興と弟子檀越とを結びつける要因の一つとなり、ひいては教団の定着化を進行させた指摘している。⁽¹⁸⁾年中行事・仏事の際に供えられた供物もまた、日興とその門弟の食や生活を支える貴重な供養となったのであろう。

五、おわりに

以上、日興書状にみえる物品授受の視点から、日興と弟子檀越との交流や生活状況について考察してきた。弟子檀越からの物品は、年中行事や仏事の際はもとより、日常的に種々の物が日興の元へと届けられ、日興もまた弟子檀越に対し激励の意を込めて物品を贈っている様子が窺える。また日興は手元へ届けられた物品を聖人の御影前に供えて聖人に報告し、その旨を書状に認めて弟子檀越に送っている。これらのやりとりから、物品を贈与してくれた弟子檀越への感謝の意と共に、日興の聖人に対する随順の念が窺える。

前述した通り、中世社会は贈答行為が非常に頻繁に行われた時代であり、今回考察した日興書状にみえる物品授受は氷山の一角であって、日興在世中における物品授

受は実際にはより頻回であったと想定される。このような度重なる物品授受が日興とその門弟の生活を支えたであろうことは想像に難くなく、また高木氏が指摘するように、物品授受を通して日興と弟子檀越が結びつきをより一層深め、門流内の親密性と連帯性を高めるにつながったと考えられよう。

なお、本稿では物品個々についての詳細な検討を行うことができなかった。その点は今後の課題としたい。

註

(1) 日興上人全集編纂委員会編『日興上人全集』(一九九六年 興風談所)

(2) 『興全』収録の日興書状九三通の内、執筆年が示されている書状は一五通のみである。また日興書状の内容に関する課題点の一例を挙げると、徳治二年(一一三〇七)七月十二日の日興書状『与了性御房書』(『興全』一六九頁)等に垣間見える鎌倉の日興門下に加えられたとされる法難が挙げられる。当法難に関連すると思われる日興書状は散在するものの、それらの執筆年が不明等の理由から書状毎の関連性が判然とせず、現時点では当法難の全容解明には至っていない。

(3) 盛本昌広著『日本中世の贈与と負担』(一九九七年 校

倉書房)五一頁、同著『贈答と宴会の中世』(二〇〇八年 吉川弘文館)二一六頁。

- (4) 日興書状を収録した史料集としては、日蓮宗宗学全書刊行会編『日蓮宗宗学全書』(以下『宗全』と略記)第二卷(一九二二年 日蓮宗宗学全書刊行会)が早くに刊行され、七〇通の日興書状が収録された。次いで、正本堂建立記念出版委員会編『日蓮正宗歴代法主全書』第一卷(一九七二年 大石寺)や『静岡県史』資料編⁵ 中世一(一九八九年 静岡県)等が刊行された。その後『興全』が刊行され、本書では既刊書にみられる誤読の訂正と新出史料の追補がなされ、九三通の日興書状を収録している。以上のような研究経過を踏まえて、本稿では『興全』を底本として使用することにした。

- (5) 中村練敬著『日蓮聖人と諸人供養』(一九七二年 平楽寺書店)。中村氏は聖人遺文に見られる供養品を、本書目次の二から十七までの計一六項目に分類して考察している。
- (6) 坂井法暉稿「重須本門寺と大石寺」『興風』第十一号 日興上人研究特集(一九九七年 興風談所)所収 一二八、一二九頁

- (7) 大黒喜道編著『日興門流上代事典』(二〇〇〇年 興風談所)五八九頁。以下『上代事典』と略記。

- (8) 日興からの物品贈与が記される日興書状一二通の内、被贈与者が特定できない書状は一通確認される。また、弟子檀越から日興への物品贈与が記される日興書状五五通の内、

贈与者が特定できない書状は二〇通(内、表二⁴⁷『御しゆ御返事』は、文脈から二名の贈与者の存在が想定され、一名はいよ尼と判明するものの、もう一名は不明である)確認される。したがって表二には、物品の贈与者・被贈与者が判明する日興書状として、日興からの物品贈与が記される書状一通と、弟子檀越から日興への物品贈与が記される書状三六通(先の『御しゆ御返事』含む)の、計四七通を収録した。

- (9) 『興全』一八一頁
- (10) 『興全』一六六頁
- (11) 『興全』一七五頁
- (12) 『興全』一八五頁
- (13) 『興全』一八七頁
- (14) 『興全』一八六頁
- (15) 『興全』一九一頁
- (16) 『興全』二四九頁
- (17) 本六人とは、建武三年(一三三六)の三位日順「日順阿闍梨血脉」によれば「准望^ニ法主^ニ佳例^ニ授与^ス六人名言^ニ、頗上聖値遇^ニ古老^ニ、仍過半先立^ニ逝去^ス、往古所^ニ治定^ニ故云^ニ本六人^ニ」(『宗全』二卷三三五頁)とあって、聖人が生前に六老僧を選定したことに倣って日興が定めた本弟子六人のことをいう。具体的には永仁六年(一二九八)の日興『白蓮弟子分与申御筆御本尊目錄事』に「此六人者日興第一弟子也」(『興全』一二三頁)として挙げられる寂日房日

華・卿公日目・下野公日秀・少輔公日禪・摂津公日仙・性房日乗の六名を指すとされている。

- (18) 『日興』与民部殿書「御学門体如何」(『興全』一八四頁)、同『与民部公御房書』「御学門候覧に紙などをまもらせす候事無心本」候(『興全』一八六頁)。

- (19) 桜井英治稿「日本中世の贈与について」(『思想』第八八七号)一九九八年 岩波書店所収 一六頁

- (20) 出版委員会編著『日目上人』(一九九八年 継命新聞社) 一九八頁

- (21) 『興全』一五五頁

- (22) 堀日亨編『富士宗学要集』八卷(一九五七年 富士宗学要集刊行会) 二二頁

- (23) 『日目上人』三八九頁

- (24) 『日目上人』三九四頁

- (25) 『日進聖人仰之趣』(室住一妙著『純粹宗学を求めて―室住一妙遺稿集―』(一九八七年 山喜房佛書林) 三三二頁) (第七) 一 聖人物作講坊アトニ田広サ円 タミ四五帖シキ代 波木井殿ヨリ苗ヲ百把御コイアレハ無相違二百把マイリタリ 其苗老僧連サウトメニメウタヲウタエナト、ら仰ウエサセ給ケル也、(第九) 一 聖人マメ麦アハ時随老僧連アテ、□上二三本四五本、植サセ給ヒケル也」。聖人や門弟らによる農耕生活を伝えるこれらの記述は、僧侶の生産活動を禁止するインド仏教の戒律と相反するものであり、当時の日蓮教団における戒意識の問題とも関わって

くる事柄である。この点に関しては今後の研究課題である。(26) この点に関しては、『日目上人』九二頁にも指摘されている。

- (27) 『日目上人』三八五頁

- (28) 『興全』一八六頁

- (29) 『興全』二四四頁

- (30) 日乗の鎌倉在住を示す史料としては、日興『白蓮弟子分与申御筆御本尊目錄事』(『興全』一二二頁)に「鎌倉住人了性房日乗者日興第一弟子也」、日興『与了性御房書』(『興全』一七六頁)に「鎌倉中の災難事をくしるし給て

みまいらすへく候」等がある。さらに徳治二年(一二〇七)七月十二日の日興『与了性御房書』(『興全』一六九頁)等に散見される鎌倉日興門下に加えられたとされる法難について、日興が当法難に関する裁判の対処を日乗に指示していることも挙げられる。また日盛に関しては、日興『与民部殿書』(『興全』一八四頁)「御学門体如何。相構ていとなませ給へし。民部殿の御事ハ了性御房の御さハくり候あひた」、日興『与民部公御房書』(『興全』一八七頁)「鎌倉中災難事承候了。猶々聞食事者可仰候」等が挙げられる。

- (31) 『上代事典』二二三頁によれば、南条時光『讓状』(『富士宗学要集』八卷二八頁)の「大行さし(差) あい(合)のあいだ(間)、まへ(前)をばそ(曾)ね(根)どの(殿)にか、(書)せて候」の文と、南条時光『置状』(『富士宗学要集』八卷二五頁)の「だい(代)くわん(官)

そ(曾)ね(根)のすけ(亮)」との記述から、曾祢殿は南条時光との親交があった人物であり、また時光の代官を務めている「そねのすけ」との同人である可能性は大きいと指摘している。

(32) 『興全』二〇四頁

(33) 『上代事典』二二三頁

(34) 表三の孟蘭盆と秋季彼岸については仏教行事の一つでもあるが、加藤友康・高埜利彦・長沢利明・山田邦明編『年中行事大辞典』(二〇〇九年 吉川弘文館)五四三頁「年中行事」の項目には「原則として一年ごとに、一定の日にくり返される一連の行事」との解説がされている。そこで本稿ではこの解説に従い、孟蘭盆・秋季彼岸の二行事を年中行事として扱うこととした。

(35) 山中裕著『平安朝の年中行事』(一九八八年 塙書房)

二〇五頁によれば、端午節句に粽を食した記録の初見として『師光年中行事』引用の『宇多天皇御記』の「五月五日五色粽」の文を挙げている。

(36) 『窪尼御前御返事』(立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』(二〇〇〇年 身延山久遠寺)一五〇二頁。以下『定遺』と略記。)[「粽五把・笏十本・千日ひとつ、^シ給^ル了」]

(37) 七年忌仏事と三十三年忌仏事について、かつて圭室諦成氏は「葬式法要の発生とその社会経済史的考察」(日本宗教史研究会編『日本宗教史研究』(一九三三年 隆章閣)

所収)一九六頁において年忌仏事の初見について触れ、七年忌は貞治三年(一三六四)、三十三年忌は元弘二年(一三三二)に見られることを提示した。その後高木豊氏は「日興とその門弟」(川添昭二・高木豊・藤井学・渡辺宝陽編『研究年報 日蓮とその教団』第四集(一九八一年 平楽寺書店)所収、のちに高木豊著『中世日蓮教団史攷』(二〇〇八年 山喜房佛書林)に再録。)において、元亨二年(一三三二)六月十五日「聖人御弟子蓮持尼七年」の授与書を有する日興本尊(日興上人御本尊集編纂委員会編『日興上人御本尊集』(一九九三年 興風談所)二三頁)と、延慶三年(一三一〇)七月十三日「民部房外祖父為三十三年也」の授与書を有する日興本尊(右同一四頁)を挙げ、両本尊が七年忌と三十三年忌の初見史料として先立つものであることを指摘した。近年、望月友善氏は「鎌倉時代の忌日供養塔婆について(下)」(歴史考古学研究会研究部編『歴史考古学』第二十七号(一九九〇年 歴史考古学研究会)所収)五頁において、埼玉県北埼玉郡(現在は合併により加須市)の真言宗智山派西円寺に在する「右志者為慈父聖靈往生極楽/弘安十一年二月彼岸第六番/右志者為悲母聖靈第七年也」との銘文を有する板碑(右同二二号「石造品銘文集(一)」(一三五頁)と、兵庫県加西市の曹洞宗西福寺に在する「右志者相当三十三年忌辰/(中略)嘉元三年十二月十六日 孝子 敬白」との銘文を有する板碑(右同二四号「石造品銘文集(二)」(六九頁)の存在を紹介して

いる。この両板碑は弘安十一年（一二八八）における七年忌と、嘉元三年（一三〇五）における三十三年忌の存在を伝えるものであり、高木氏の説を年次的にさらに遡る史料として、注目すべきものである。

（38）松村壽巖著『日蓮宗儀礼史の研究』（二〇〇一年 平楽寺書店）一四頁

（39）『興全』一八八頁

（40）『興全』二二六頁

（41）『興全』一九四頁

（42）『興全』二一五頁

（43）『興全』一九〇頁

（44）『興全』一二四頁

（45）日興『西御坊御返事』（『興全』一五五頁）

（46）『兵衛志殿女房御返事』（『定遺』一七一頁）

（47）河鰭実英稿「中世人の生活―衣・食・住・行事・甲冑―」（『国文学 解釈と教材の研究』第七卷第十一号（一九六二年 学燈社）所収）一三六頁、渡辺実著『日本食生活史』

（二〇〇七年 吉川弘文館）一一四頁～一三四頁、江原絢子・石川尚子・東四柳祥子著『日本食物史』（二〇〇九年 吉川弘文館）八六～九一頁。

（48）高木豊著『中世日蓮教団史攷』一四一頁